# スティックサイダー

山田スウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スティックサイダー

【Ｎコード】
Ｎ３３７３Ｗ

【作者名】
山田スウェル

【あらすじ】
美少女の形をした空っぽなセックスフレンド、雨宮。美人じゃないけれど生活の面倒を見てくれる成美さん。そして妹という繋がりを永遠にしたがるのがブスなマキ。
三角形に囲まれた僕の生活が今、壊れようとしている。

# 1

食って寝って食う。僕の生活は三角形。満足していると言えば嘘だけど、耐えられない程の不満は無い。だから幸せかと聞かれたら、不幸じゃないのだと言える。

1.

よく晴れた日だった。レンタル屋に買った方が安い位の延長料金を支払い、その先で雨宮に会う。雨宮は向かいの百円ショップから出てきて僕を見つけるなり駆け寄って来た。ちなみに僕らは毎日が休日の、所謂ニートだ。

「ちょうど良かった！」

「荷物は持たないよ」

断った側からビニール袋を押し付けてくる。

「良かったー。今日、とっても安かったから買い過ぎちゃったんだ」

「僕の知ってる限りじゃ、この店は常に百円だけど」

聞こえない振りして雨宮はリュックの脇から鍵を探す。駐車場を見れば彼女の愛車がこちらを睨む。どうもあの切れ長のライトが好きになれず、真っ黒なボディーは雨宮に向いてるとは思えない。

証拠にドライバーは未だ鍵を探し、掴んでは取り出すのはレシートや菓子の包みばかり。僕は呆れ、雨宮の細い腕を見守った。すると視線に気付いて、赤い舌が出される。

「ごめん、ごめん。ちょっと待ってて！　乗ってくでしょ？　」
「早くしてよ、暑い」

不機嫌な応えに、やっとリュックはコンクリートへ置かれた。紐を解き、大きく口を開ける。最初からそうすれば早いのに、言い掛け止めたのは、覗いた中身があまりにも酷いから。少なくとも僕の恋人は生理用ナプキンは見せないようポーチへしまう。淡い色したワンピースを直視出来なくなった。

「あった、あった！　」

暫くし、無邪気な声が上がる。

「んじゃ、車持ってくるから、ここに居て」

すぐさま駆けていく雨宮。残されたリュックは開いた口が塞がらない。僕はいい加減見慣れてしまったが、あのキーケースを貢いだ男はどうなのだろう。とりあえずリュックの口を蝶々結びしてやった。新しい彼との関係を荷物から察するのはフェアーじゃない。

雨宮はだらしのない美少女。こんな風にいつも無防備で、少し壊れている。けれど最近こうも感じるんだ。結局の所、雨宮みたい女を男は求めてしまうって。　この先も雨宮は男にだけは困る事など無いと思う。茹だる暑さで視界は歪むのに、不思議と雨宮の隣は鮮明に描けた。

雨宮のマンションに向かう途中、携帯電話が震える。僕の物だ。雨宮は一瞬だけ視線を寄越し、成美さんの名前を吐き捨てた。雨宮は男にされてるように僕の携帯電話をチェックしているらしい。

ボタンを押すと賑やかな雰囲気が漏れてくる。

「あ、もしもし？　」
「はい」
「今、大丈夫？　」
「はい、休憩中ですか？　」
「うん、今からお昼を買いに行くの」

車内の時計は三時を過ぎて、いつもならもう少し早い時間に休憩を取っているのに。また後輩のフォローとやらでもしたのだろうか。

と、サイドミラーへ前髪をいじる姿が映り込む。僕は昔から面倒くさがる時、前髪を触ってしまう。癖を発見した雨宮が声を殺して笑っている。

「今夜、会えないかな？　」
「……本当に来てくれるんですか？　この間もそう言って来て来れなかったから。観たがってたＤＶＤ返しちゃいましたよ」
「うん、ごめんね」

成美さんは声を落とす。けれどトーンを低くした位じゃ優越感は隠せない。僕は知っている、成美さんは僕を傷つけて楽しむんだ。

待ち合わせの時間を確認しないまま通話は終わって、暗くなるディ

スプレイに前髪を乱した僕が居る。

「大変ね」

感情を込められない雨宮。

「別に」

信号で待たされる雨宮は僕の前髪を整える。雨宮の指先は冷くて心地良い。流れで目を閉じると音が聞こえた。

当たり前の事だけど、今日も雨宮の心臓は動いている。

恋愛の先にあるのは何なのか。僕は出来るだけその事を考える。今も部屋には上がらず、ドアの前で煙草をくわえ考えていた。成美さんが約束を守った場合を考え、雨宮とのセックスは避けたい所。出来るだけスマートな言い訳を探す側から、大きな物音は立てられ続ける。なんでこんなにも部屋が汚いのか、雨宮は嘆く。

ちなみに僕が知る限り、部屋が片付いていた試しは無い。いつもこうして待たされては、その間に恋愛の先を思い浮かべるんだ。

「お待たせ」

後頭部を預けるドアが開く。わざと勢い良く開ける事でバランス

を崩し、それを理由に抱きついてきた。

「今日はしない」
「いーよ、ただ一緒に居たいだけ」
「嘘付き」
「嘘じゃない」

とは言え、雨宮の嘘は幼くて騙されてやってもいい気がする。むしろ、そんな嘘しか雨宮は付かない。寝室へ連れ込まれる手前、キッチンの冷蔵庫が唸った。
相変わらず一人暮らしにしては大きな冷蔵庫。中身はキャベツと調味料くらいで、後は凍らせた物達。雨宮はやたら冷凍庫に放る癖がある。
今回は何を凍らせたのか、妙に気になってノブへ手を伸ばす。と、たちまち足下へ中身が落ちてきた。

「……サイダー？　」

床をずしりと響かせたのは凍ったペットボトル。ペットボトルは膨張し、商品ラベルが破れそうになっている。雨宮も僕もサイダーを拾うでもなく、暫く見下ろした。

「こんなの凍らせてどうするの？」

「あのさ、そんな事しか言えない訳？　」

「だって他に質問なんて無い」
髪を耳に掛ける雨宮。柔らかく痛んだ毛先は纏まらず、はらはら頬を滑ってしまう。そして埃のつもった床を眺め、鼻息で飛ばすことを思いつく。あぁ、僕らはこんな時に思い知る。悲しい位に退屈だって。

世の中には働かずとも生きて行ける、与えなくとも与えられる僕等がひっそり存在する。
このご時世、誰かの寵愛のみで生きられる、そんな都合の良い話など無いって疑われるだろう。人としての在り方を問われるのかも知れない。
だから僕に言えるのは、僕は成美さんに生かされている。誰しもが憧れる満ちた幸福に似た、不幸じゃない空間で息をしているんだ。それだけだ。

雨宮が無言でサイダーを押し戻す。

「でも君くらい。なんで凍らせるのかって聞くの」
「理由はあるの？」

首を振る雨宮。

「なら、見つかるといいね」
「は？　」
「理由、凍らせる理由」

僕は笑ったのか、雨宮が表情を弛ませる。けれど相変わらず視線は迷子のままで、僕を越えた先、キングサイズのベッドを意識していた。
実はサイダーを拾った際、雨宮の足首が赤く腫れていたのに僕は気付いている。

雨宮は何回かに一回、まるで選ばなきゃいけないように暴力をふるう男を恋人として迎える。雨宮はボロボロになるのが好きなんだ。殴られ、なじられ、可哀想になった後、うんと優しい男が寄ってくるのを知っているから。

そんな雨宮もすっかり気を削がれたらしい。リビングに方向転換し、ニュースを流し始める。キッチンからだとソファーに座る後頭部しか確認出来ないが、伝えられる世界の不幸にリズムを取っている。

僕は隣へ行こうと冷蔵庫から水道水を取り出す。サイダーの入っていた容器は、洗われないまま水道水を流し込まれたに違いない。この間はコーラの味がしたし、その前はオレンジジュースの色が残っていた。

それにしてもい部屋が汚い。リビングは最も酷く、テーブルの上には食い散らかした弁当やら化粧品が散乱している。
遮光カーテンなどうっすら黄ばみ、遮らないでいいものまでシャットアウトした。挙げ句、絨毯には摘める程の毛玉があちこちに発生し、僕は膝を抱えソファーへ座る。

「部屋の状況が心の状態を表すって、聞いた事ない？　」

口を尖らせ、ペットボトルへ吸い付く雨宮。ちゅばちゅば、音をさせる。続けて「うーん」などと唸り、２ＬＤＫを見回した。

「もしそうなら、あたしもまんざら空っぽって訳じゃないのね」

ちゅば、入り口に舌を差し込む。先を細くし、嫌らしく左右に動かす。僕はこの予想しなかった返答に今度こそ笑顔を浮かべ、雨宮も笑った。

雨宮のマンションを出た直後、成美さんから呼び出しがあった。駅まで傘を持って来て欲しいと頼まれたが、どう見ても雨は降っていない。陽も落ち、日焼けの心配も無さそうだ。

雨傘を持て余している僕を見たい。つまり、そうう事だ。多分、成美さんは約束から数本遅れた電車でやって来る。混んでもない改札口をゆっくり降りて、僕を探す振りをする。とっくに認識している僕を、だ。

三本目をくわえ、星空を仰ぐ。星座は知らないが、星を観るのは嫌いじゃない。

滲む月へ煙を吹きかけ、唾を吐く。

成美さんと会うのは緊張する。こういった関係は初めてじゃないし、飽きられない自信もあるのに。

ただ何と言うか。成美さんは完璧な不完全で、一度崩れたなら跡形も無くなってしまう。脆さを剥き出しにする女性。だから怖い、怖いけど知りたい。

成美さんの全てを知ってしまうのが、恋愛の先にあたるとしたらどうしようか。怖い、怖い。でも知りたいのが僕。だから暇があれば想像したがる。

行き交う人々はたまに僕の雨傘に視線を落とし、それぞれへ向かっていく。時間帯からサラリーマンやＯＬが多く、みんな疲れた顔を張り付けていた。

その自分ばかり疲れたって顔にはうんざりする。僕だって一ヶ月だけだがサラリーマンをした事があるんだ。まぁ、満員電車や理不尽な上下関係に嫌気が差したという以前の問題で、朝出社したら会社が倒産していたのだけれど。
今ならあの時の自分を笑い話に出来ても、当時はかなりのショックを受けた。

雨宮は僕がセックスのし過ぎて淡泊になったと言うが、二十歳の僕は童貞で、倒産の張り紙を踏みしめたその足でソープに駆け込んだんだ。

爪先で煙草を潰す。コンバースのハイカットはもう四代目になるか。煙草の銘柄は頻繁に変えてもスニーカーは違う。薄汚れたベンチへ丁度いい具合に汚した靴で乗り上げる。
こんな風に膝を抱えて座るのは雨宮の所為。
身体を小さく折り畳む体育座りは鼓動を感じられ、ほら、どくん、どくん、どくん。
個人的にはリストカットより、体育座りの方がよっぽど生きてい

ると思える。結局、痛いのが嫌いだ。優しくされたいし、優しくしたい。優しくするのは気持ちいい、優しくされるのは心地いい。
なら何故、成美さんは僕を傷つけたがるのか。切れ長な瞳で穏やかに見下すのか。
僕は成美さんが好き。それは家賃も食事も成美さんが居なければままならないし、依存、寄生と呼ばれて構わない。

ふいに視線を感じ、見れば成美さんがこちらへ近付いてくる。僕はすぐさま立ち上がり手を上げた。どうせ見えない振りをされるのだから、ゆるく振っておこう。予定通り、一回は僕を通り過ぎ、それから業とらしく気付く。
「お待たせ、帰り際に後輩から相談されちゃって。ごめんね、かなり待ったよね？」

僕の胸の前で手を合わし、薬指をきらきらさせた。

「うん、待った。来てくれないかと思っちゃった」
「そんな！　約束をすっぽかしたりなんてしないよ！」

悪びれない仕草がほんのり期待に染まる。そんな顔をされたらキスをしたい、抱き締めたい。けれどその前に伝えなきゃいけない事がある。

「成美さんって、酷い人だなぁ」

前髪を掻きつつ、困った風に呟いた。すると成美さんから抱き付き、その華奢な腕で僕の心の何処かを軋ませた。
もう最近じゃ痛まないけれど、成美さんにつられて僕も歪むのだ。
いつもキレイに染められる旋毛へ溜息を吹きかける。

「くすぐったいよ」

身を捩る成美さん。ピアスを撫で、項にも触れる。柔らかい、成美さんは張りの無い柔らかさ。

「どうしたの？　」
「甘えたくなって」
「なんだか珍しい」

珍しいも何も久しぶりに会えたんだ。成美さんの香りを目一杯吸って気持ちを耳へ吹き込んだ。成美さんは言葉を理解するなり財布を取り出す。決してスマートといえない手付きでジーンズに忍ばせて、金を貰った事がますます成美さんを強く求めさせる。

「成美さん、大好きです」

ここに嘘などない。

## 2

2

食って寝て食う。このトライアングルは崩してはならない。僕は成美さんを送った後、すぐさま買い出しに出掛けた。

どうも金を得ないと腹が空かない。働かざるもの食うべからずという父の教えが染み着いているなら気が滅入る。俯いた所で、床に映り込む僕は父親にそっくりだった。

父は未だ調理師として働いているのだろうか。高校を卒業して以来、実家と連絡を取っていない。いや、正確に言えば取れなかった。電話を取り次いで貰えない程、僕は継母に嫌われていたのだ。

こうして離れ、改めて考えてみれば、母は自分に似てしまった娘の手前、僕に辛くあたったのかもしれないと思えもする。

料理の盛り付けをあんなにも拘る父の再婚相手が、頬をニキビの痕で抉らす女性と知った際、僕は少なからず父に裏切られたと感じたはずだ。だって父はきれいなものが好きじゃなきゃいけない。

そして母はそんな僕を見逃さなかった。後から繕うとしたって受け入れては貰えず、結局何にしろキレイなものは跡形も残らないんだ。で、逆のものはずっと残る。底の方でこどんでしまう。

ドリンクコーナーの前でサイダーが目に付く。手に取ると雨宮の顔が浮かび、底には成美さんが見えた。キレイはものは跡形も無くなるといえど、成美さんは壊したら跡形がなくなるタイプ。そこに存在していたか分からなくなる人。　じゃあ雨宮はというと、彼女

の容姿を整っていると感じないなら図形認識に問題がある。雨宮は女性としての形は完璧に近い。いつかアイドルになれると進言したが、雨宮は決まって抑揚の無い声で返す。わたし働きたくないの、って。

結局、カゴの中に入れたのはサイダーが二本とインスタントラーメンだけ。支払いの際、鍵に付けたマスコットを紛失しているのに気付く。名前は忘れたが、深夜に放送されているアニメのキャラクターで、狼が椅子に座っているものだ。男を狼に喩える辺り、成美さんから昭和を嗅いでしまう。
ちなみに僕にとってはナフタリンが昭和の臭い。

父方の祖母は押入れに大量のナフタリンを置いており、特別な日に食べるという菓子にまで臭いが移っていた。

両親が離婚し暫く、祖父母に預けられる事が多かった為、子供ながらあの菓子を喜んだ振りして食べたものだ。地味で無駄に甘いだけならまだしも、鼻を刺す臭い。トイレに行っては吐き捨て、唾を拭いながら父を恨んだ。

記憶にあるのは汚い映像ばかり。やはりキレイなものは残らない。僕にだって楽しい事はあっただろうに、いざ思い出そうとしても薄いモヤがかかっている。
モヤに爪を立て引き裂いてもいいけれど、そうまでして取り戻さなきゃ生きられない現状じゃない。昔の良かった事に縋るのは嫌だ。たぶん、これが僕にとっての最後のプライドだ。

狼を失った旨をさっそく成美さんへ報告する。明日、もう今日になるか。早くから会議があると言っていたから寝ているかもしれない。
成美さんは部屋のドアしか教えてくれない為、ベッドで寝ているのか布団かは知らない。そこへ横たえる身体の深くも知らない。

雨宮は僕らの関係を不潔と言う。僕だって求めるのが礼儀と思い、何度かは誘った。けれどその度、成美さんは自分達の間に行為は要らないと力説するのだ。

僕はいつも誰かの愛人をやってきたけれど、セックスは好きな方じゃない。特にあの濡れた音が。肌と肌が密着し、見えない糸と見える糸が絡まっては切れていく。女性が快感を求めようとあんぐり開けた口を、動物的に腰を振りながら見下ろす時、僕はどうしようもない気持ちになる。もし、この居心地の悪さを人が気持ち良いと呼ぶものなら、僕には自慰が向いている。

成美さんがセックスをしたがらないなら、それはそれでいい。むしろ有り難かった。

サドルに跨って返信を待つが、受信ランプは付きそうない。代わりとばかりに雨宮から電話が掛かってくる。

「もしもし？　」
「雨宮ですけど」
「見れば分かる」
「番号登録してくれたんだ？　」

雨宮の背後は賑やかだ。

「何処にいる？」
「迎えに来てくれるの？」
「車は？」
「お酒飲んじゃったから」
「ねぇ、何で成美さんと会う日に電話してくるの？」

質問の瞬間、辺りは静まる。少しすると通話が途絶えた音しか聞こえなくなった。溜息をつく間なく、雨宮から非難のメールが続々届けられる。

雨宮は既に食って寝て食うのライフスタイルに組み込まれているから、関係を断つ気はない。成美さんには気取られないようにする。三角形の均衡を守る為だ。だから再び携帯電話が震えても、気付かない振りをする。

どうか始まりも終わりもありませんように。思い切りペダルを踏み、立ち漕ぎに切り替え、星空を見上げた。星は遠い。遠すぎる。これを手に入れようなんて望まない。無茶もしないから、僕からこれ以上取り上げないで。

けれどそんな祈りを捧げた夜は僕を裏切った。

## 3

3

僕の名を呼ぶ人が久しぶりに居た。大きなボストンバッグを抱いた垢抜けない表情が、僕をたちまち苛立たせる。戸籍という括りが僕とマキをより隔てている。促された椅子へ崩れ込み、唇をぎりぎり噛んだ。

そう言えば、マキが僕を追って家を出たと母に責められた。あの時は、どうせ窮屈から飛び出す口実にされたのだと気にしなかった。と言うよりマキの存在自体に興味が無かった。

血が半分は繋がっていると言われてもそれは目に見えるものじゃなく、そもそも血は量じゃない。母の言動に腹を立てるのに疲れ、全く似つかない妹は地味で頭が悪い。きれいなもの好きな父似の僕は到底受け入れられない。

それがどうしこんな場所へ呼びつけられなきゃいけない。菓子折りを持って行った以来、管理人の私室など用は無かったはずだ。

アパートは成美さんの前の前の女性が借りたもので、今時甲斐甲斐しく入居者の面倒をやく管理人がいる、確か名前は南野。北部屋に住む管理人の南野です、なんて自己紹介が強烈で忘れさせてくれない

いつもは何時に帰ろうが構わないこの管理人が、今夜に限っては表をうろうろし、坂道を上る自転車を見つけるなり駆け寄ってきたのだ。

形だけの兄妹は向き合い、沈黙は続く。僕への来訪者は南野にはめでたいらしく、テーブルにはコンビニの赤飯が置いてあった。それにしても南野の部屋は生活感に満ちみちている。壁に無料配布されたカレンダーがいくつも張ってあり、ゴミの日や会合などの予定がみっちり書き込まれていた。側には水性マジックが蓋を開けたまま転がり、ペン先から想像上のシンナーが臭う。

はっきりいって物があり過ぎなんだ。収納用のカゴも無意味、質量に耐えられずプラスチックが歪んでしまう。

「とにかく、お部屋でゆっくりしておいで」

マキをすっかり気に入った様子の南野。年寄りがぽっちゃり体型を好むのは本当らしい。ぱんぱんに張った頬を褒めちぎり、マキもまんざらじゃないから絶句してしまう。言われなくとも、こんな場所にはいつまでも居られず、仕方なくマキを連れて席を立つ。

「どうもすいませんでした」

「怒らないであげてよ？　マキちゃんはあなたが心配だっただけなんだからね」

「わかってます」

流石の南野も僕らの空気を察する。今日は時間も時間で、南野の手前泊まらせるが、明日一番に追い出す。マキは黙って後ろへ続き、足音をさせた。

「やめてくれない？　」

階段に差し掛かり振り返る。一歩を踏みだそうとしていたマキは

不機嫌な僕を見上げ、かくかく首を傾げた。

「にぃに、何怒ってるの？　」

「その呼び方もやめろ」

「だってお兄ちゃんじゃん」

数年振りのマキはやはりマキで、それ以上でも以下でもなかった。あんまりにも変わらない鈍さは呪いだ。

痩せて自分を良く見せようとか、学んで賢さを得ようなど、これっぽっちもしないマキ。生まれた時から僕が兄で当然の、優しくされるのをひたすら待っている。

奥歯を噛んでいるとマキが笑う。

「にぃに、格好良くなったね。彼女いるんでしょ？　雨宮さんって人」

隣へ並ばれる。錆びた階段は様々な感情で軋み、もう少し高さがあれば突き落としてやりたかった。これも色んな意味で。幸い、僕とマキの間にはボストンバッグが挟まれ、少しは吸収される。

「すごい美少女みたいだね？　管理人さんがアイドルみたいって言ってた」

「お前とは違うんだよ」

語尾に「ブス」と付け加えようとした時、僕は久しぶりにこの単語を口にするのに、はっとする。

これは実家を離れて以来、マキほどのブスに出会っていない証拠

なんだろう。

「ねぇ、にぃに」

僕は応えず部屋に向かう。

「あたしはさ、にぃにを裏切ったりしないよ」

鍵を回す。最低限の開け閉めをしたが、マキのスニーカー、コンバースのハイカットが押し込まれる。

「美人は裏切るよ」

「何を根拠に？」

「にぃにのお母さん。それにあたしのお母さん」

僕が吹き出すより先、マキが笑う。

「母さん、浮気されてもされても離婚しないんだ」

「で、家を出た訳？」

スニーカーに続き、パーカーまで押し込まれるが、フードがドアチェーンに引っ張られ顔が歪む。肉を削いだ素顔は母にそっくり、思わず退く。マキはそんな怯えを潜った。

「違う、にぃにを助けにきたんだよ」

脱ぎ捨てるスニーカーは曇りを示す。昔、僕らは靴を放り投げては天気を占った。靴が表なら晴れ、裏だと雨。横へ倒れると曇り。

マキは覚えているだろうか。ピアノ教室への送り迎えを強要された僕は、天気を占うと言ってスニーカーを背中にぶつけていたのを。マキは痛い痛って繰り返し、やっと僕の前を歩かなくなったんだ。僕はあの日の事を、たぶん今日みたいな日を消せない記憶で持っている。
僕はドアを滑り、膝を抱えた。

「にぃに、帰ろうよ。あたしが一緒に帰ってあげるからさ」
「うるさい。　帰るなら一人で帰れよ！　」
「そんなの出来ないって、にぃにが一番知ってるじゃん」

リビングへのドアを開けて、こちらに戻ってくる。靴下だけになっても足音は粘着く。

「大丈夫、ブスは三日で馴れるって言うじゃん」

言いながら僕を引き上げた。
強く、強く握られる感覚こそ、あの日の続きみたいだ。

「吐き気がする、触るな！　」

「ねぇ、にぃにを愛してるって事が、そんなに気持ち悪い？　」
「ああ、気持ち悪い！　」

何もかも振り払い、水道に向かう。蛇口を思い切り捻ったら、溢れるコップを睨む。

「お前、どうしてここが分かった？　」
「ずっと探してた」

「だから、そういうのが気持ち悪いんだって！　」

怒鳴りながら振り返ると、距離を異常に詰めたマキが居た。反射的に仰け反った為、姿勢を崩し、シンクで頭を打つ。

気付けばマキが僕を見下ろしていた。

翌朝、追い出される前に朝食を差し出される。僕はもちろん食う気や、会話するつもりも無い。裸足でベランダへ出て、起こってしまった最悪を嘆く。

庭先を掃く南野が居た。僕に気付くと額に手をやり、眩しそうに見上げる。

「おはようございます！　今日は観光？　」

「いえ、何処にも行きませんよ」

マキへ聞こえるように続ける。

「今から約束があるんです」

南野の背後を指さす。雨宮は絶妙なタイミングで坂道から登場し、僕らへ合図を送る。スマートとはこういう事。

「あぁ、こんにちは雨宮さん」

無駄に大きな南野の声がキッチンに居るマキを刺激する。僕はすかさずマキに言った。

「雨宮が来るんだ、出てってくれない？　」

トーストを一口しただけで、マキはテレビを観ている。後ろ姿でさえ美しくない。僕はマキを出来るだけ傷つけてやりたくなった。言葉より確かな現実で、マキは傷つくべきだと思う。
殺気を帯びた視線にやっと振り向くマキ。一瞬笑おうとし、やめた。

「出てかないなら、雨宮を紹介してやるよ」

ぴーんぽーん、やっぱり良い間でインターホンを鳴らしてくれる。マキは慌ててフォークを握り日常を演出するが、緊張を隠し切れない。
僕はわざとそんな正面を横切ってやった。マグカップの中を激しく波立てたくて。

## 4

4

それから雨宮と僕とマキはテーブルを三角形で囲む事となった。予想通り、雨宮は妹を紹介しても驚かず、マキは雨宮を見るなり俯く。今日の雨宮は化粧をしっかり施し、服装も大胆。圧倒的に美少女だ。

「これから会うの？　」

僕は遠慮なく雨宮を爪先から眺める。

「にぃに！　」

雨宮を直視出来ず、僕の顔色ばかり伺っていたマキが咎めた。が、それはすぐ雨宮に一蹴される。

「いいよ、別に減るもんじゃないから……えっと」

「マキ、です」

長い足を窮屈に組み替え、マキの旋毛を見る雨宮。ぱっちり見開かれた二重はマキをどう映しているのだろうか。

「何？　」

雨宮には僕が欲情などしていないのは伝わっている。

「別に。似てないだろ？　」

「まぁ、ね」

ふ、と息を抜いて続ける。

「マキちゃんって前髪、天パ？」

「え？」

「ほら、内側がくるくるしてるじゃん」

顔を上げたマキに雨宮は笑顔を向けた。雨宮の笑顔に暖かさや優しさなど無い。ただ顔のパーツそれぞれが、きちんと役割を果たしているだけ。だから妙な凄みがあり、マキが息を飲む音が聞こえた。

「どうしたの？　」

肘をつき雨宮はマキを覗き込む。僕の位置からマキがどんな反応をしたか分からないが、美しい雨宮の後頭部に遮られるのなら悪くない。

「いえ、なんでも」

消え入りそうな声で。いっそ、このまま消えてしまえばいい。

「な？　マキ。雨宮とお前は違うんだ」

「ち、違わないよ！　あたしもにぃにが好きだもん！　」

マキの叫びは跳ね、雨宮を飛び越えた。すると雨宮はマキの発言がより通るように伏せる。

「なんだ、なんだ。兄妹のいけない関係？　」

頬を片方だけ膨らめて茶化す。今にも吹き出しそうな呼吸がテー

ブルの表面を白く曇らせる。

「バカ言うな！　冗談でも気持ち悪い」

言って、雨宮の頬へ触れた。柔らかい。本来、この指に吸い付く白い肌は化粧など必要ない。けれど今の男が望むのだろう。雨宮の舌が僕の指を頬の下からなぞる。

「羨ましいなー、わたしには妹しか居ないから」

何気なくこぼした言葉が響く。雨宮は自分の事をあまり話さないし、僕もあえて聞かなかった。雨宮の妹なら同じように美少女なのだろう。

「うん、ご想像通りの街で有名な美少女だった。わたしの妹」

だった、過去形を強調してくる。これも珍しい仕草。雨宮は何か訊ねても、結局答えは要らない。僕はそんな所が嫌いじゃなかった。

「だったって」

このまま流していける話をマキが止める。あぁ、マキや母はいつもそう。雨宮と違い、マキ達は女の端をぎりぎりで生きているので余白が無いんだ。余白が無いって事は常に爪を立てなきゃいけないのを意味する。

「だったって？　どういう事ですか？　」

「うん、悪い男に騙されて死んじゃったの」

ゆっくり体を起こす雨宮。

「マキちゃん、だっけ？　ごめんね、わたしすぐ忘れちゃうの」
マキの言葉を拾う為、髪を耳にかける。その形のよい耳に吸い込まれない為、僕の口は自然と結ばれる。
「はいマキです」
「うん、覚えた。マキちゃんね」
雨宮とマキは同世代だが、向き合うとマキの方が断然幼い。容姿だけでなく纏っている雰囲気からして。
こんな田舎者を妹と紹介出来るのは雨宮くらい。成美さんには出来ない。
「マキちゃんはにぃにと何するの？」
「え？」
「好きなんでしょ？　セックスしちゃうの？」

突然、浮ついた視線を切り替え、尖った目をする雨宮。
「な、なに言ってるんですか？」
「嫌なの。マキちゃんに触れた手でわたしに触られたりするの」
こちらを見る雨宮。
「は？　そんな事、ある訳ないじゃん。妹だし……それに」
このタイミングで容姿を辱めれば、マキは窓から飛び降りてくれるだろうか。三階から落ちた位じゃ死にはしないが、悪趣味なベージュのブラウスくらい鮮やかに染め直せるだろう。

「マキちゃん、言っておくけど、わたしはにぃにが好きじゃないんだよ」

マキは混乱し、椅子を蹴って立ち上がる。その位置からみる雨宮はより美しいのに。自分の発言が理解されないのを諦める雨宮は儚げで、芸術めいている。

「でしょ？　にぃに」

「その呼び方はやめろ」

「だって、にぃにがわたしを好きなんだもん」

マキに呼ばれるのとは違った寒さを覚え、視線を外す。が、雨宮がこちらを見ている気配を強く感じる。

「にぃにに裏切られたら、わたしも死んじゃおうかなー」

テーブルに映り込む髪をいじる姿。柔らかく痛んだ毛先はやっぱり指先をすり抜けてしまう。

「し、死ぬなんて！　軽はずみな……」

「マキちゃんには分かんないよ。だって幸せじゃん」

「幸せって」

「バカみたいに幸せ、じゃん」

マキには想像がつかないのだろう。こんなにも美しく生まれた雨宮の不満など、分かりたくもないはずだ。

けれど雨宮にすれば、そんなマキの鈍感さが勘に触るに違いない。

僕の知る限り、女性はいつも誰かに嫉妬しながら生きている。嫉妬する自分を認められず、嘘をつく。決して美しいとは言えない感情に化粧をし、オシャレをさせて紛らわすものの、時折、嫉妬の尾を出してしまうんだ。
嫉妬の尾は導火線。ちょっとした摩擦で燃え上がる。

マキは深呼吸を繰り返し、それから雨宮の手を取った。

「もっと自分を大切にして下さい」
「え？　」
「そんなに可愛いんですから、何だって手に入りますよ？　にぃに以外なら」

雨宮を釣り上げる力は強引だった。雨宮はすぐさま抵抗し、距離を置く。何か発しようとしたが飲み込み、代わりにバッグを掴んでドアへ向かう。
僕は声を掛けなかった。

ドアが閉まり、階段が鳴るとマキの力が抜け、乾いた笑いが室内をより乾燥させた。もはや背もたれに触れただけでも、発火しそうな雰囲気で、僕は心の中の煙草を吸う。

# 5

5

マキは僕を好きだと言う以外、これといった主張をしなかったから、学校や社会生活においてもそうだと思っていた。僕の放つ嫌みを受け止めるよう、他の誰にも逆らわず生きている。そうしなきゃ生きられないって疑いもしなかった。

それが今、あの雨宮に敵意を剥き出しにしたのだ。僕はトーストを押し込むマキを眺め、高鳴りを隠せない。雨宮の容姿はマキに止めを刺せると考えたが、現実は違う。マキは雨宮と競る事を選んだのだ。万が一、マキが雨宮に勝っているものがあるとすれば、それは僕の知らないもの。で、知らないなら知りたい。

「にぃに、雨宮さんは可愛いだけだよ」

「でも可愛くないよりはいい」

喉を鳴らし、色々飲み込むマキ。

「別に顔さえ良ければいい訳じゃない。雨宮と僕は似てる」

何処がと言われる前にマグカップを置いた。

「例えば、こんな苦い紅茶は飲めない所とか。そういうの」

マキは黙る。暫くそうして、わかんないよって吐き出した。マキは泣いているようで、泣いていないのかもしれない。困らされてる顔しか印象になく、まぁ、どうでもいいか、いいんだけれど部屋にもう少し置いてみよう。

「仕事見つけろ」

僕は言う。

「――見つけたら、ここに居てもいいの？」

「家賃と生活費くらい出せ」

途端、マキの食が進んだ。サラダをかき込み、トマトを潰す。そのトマト、ゴーヤは成美さんが持ち込んだもの。

成美さんは僕が意識しないと思っているが、食材は肌に良いものばかりと雨宮はすぐ見抜く。雨宮と二人で、染みやソバカスが宝の地図になればいいのに、なんて昭和臭い事を言う成美さんを想像した。

ところでマキが成美さんを見たらどう思うのだろう。金銭援助をしてくれるのならマキは成美さんの代わりになるんだろうか。ふとそんな事が過ぎり、すぐ消える。

残念な事に僕はマキに借金までさせて貢がせるのは嫌だ。借金が血液を巡ってくるのを知っている。意思はどうあれ、マキは妹。妹は他の女とは違う。

マキは兄妹の関係を守りたいだけ。僕への好意もここからくるもので、雨宮の想像した類じゃない。

僕だけじゃないはずだ。妹を持つ男なら分かる。妹は男でも女でもない存在だ。

片手に携帯を持ち、マキは熱心に求人情報を見ている。今日までマキを意識してこなかったが、認識してみると妹も三角形に取り込める気もしてきた。

これまで自分も三角の一部だが、雨宮、成美さん、そしてマキが結ぶ図形の内側に収まるのもいいかもしれない。

数時間後、さっそくマキは科学館でのバイトが内定した。プラネタリウムの案内係らしい。

「星座は詳しくないけど、星を見るのは嫌いじゃないんだ」

マキは何処かで聞いた事を言っていた。

# 6

6

僕が初めて抱いた女は星菜と名乗った。源氏名だ。

朝、出社したら会社が倒産しており、気付くとソープへ逃げ込んでいた。こんな時は女に優しくされればいい、本能が導くまま星菜を指名する。遡る事、三年前。二十歳の頃だった。

パンフレットの女達はみんな同じ顔で見分けがつかなかったものの、実際に会うと個性をぶつけられた。星菜は写真で見る方が断然可愛く、きっと不慣れな僕は体よくあてがわれたのだ。けれど不思議と怒りは無く、逆にほっとしてしまう。
星菜はドアの前で立ったまま、そんな僕の反応を待っていた。

「ねぇ、うちでいいの？　」

聞くに耐えない、酷く掠れた声で訊ねられる。

「お兄さん、かっこいいし。他の子が入りたいって言ってたよ」
「星菜さんは僕じゃ嫌？　」

ベッドに腰掛けた僕を見下ろす位置にありながら、星菜は飛び降りそうな顔をした。

「もしかして、同業とか？　」
「違うよ、今日から無職」

下着とスーツが微妙な距離で対峙する。先に笑ったのは星菜。修正を施さない笑顔は皺が幾つも入り、歯も黄ばんでいる。そこに焼け死んだ声が加われば、僕の良心を簡単に殺してくれた。

星菜は隣に腰掛け、足をばたつかせた。軋むベッドが二人を乗せる船だとしたら、前に進めず、ゆっくり沈んでいくのだろう。

「リストラされたの？　」
「まぁ、そんなとこ」
「で、自棄になってこんな所に来ちゃったんだね」

灰皿を向けられた。

「吸えばいいのに」

ブランドロゴを大袈裟に主張するポーチから、セブンスターと百円ライターを取り出す。

「煙と一緒にヤな事も吐き出すの」
「僕とするのが嫌って意味？　」

この質問に星菜は肩を竦め、痛んだ毛先を方々へ散らす。

「好きな仕事をやってる人は少ないでしょ？　それに鬱憤をぶつけられて感じる女も少ないよ」

星菜は胸だけがやたら大きく、他は血管が浮き出るくらい細い。煙を出し入れする度、あばらが見えた。そのうち僕の視線に気付き、目で訴えてくる。どちらでもいいから早くしろ、と。

漠然と初めては恋人とするものだと思ってきた。煙草の味がするキスや業とらしい喘ぎもＡＶでの世界。
あの時の僕は昔から知っていた風に腰を振るのが精一杯で、壊した上から塗り潰される世界など知らなかった。セックスをする為だけに誂えた一間が、世界の全てじゃないって信じていた。
結局、セックスしても星菜に愛情を抱けず、星菜が僕を好きになったりもしなかった。

星菜を久しぶりに思い出した所為で、脳は未だぼんやりしている。記憶をこうして取り出し、たまには撫でてやるのもいい。押し込められた記憶は撫でられると眠くなる。仕事を失ってからいまいち熟睡出来ないのは、浅い眠りは目を開けても微睡みを残し、現実を夢じゃないかって期待してしまう為。こんな僕だって、人生をやり直せるならやり直したいんだ。

寝返りを打った所で成美さんからメールが届く。会議が長引き退屈しているらしい。すぐに当たり障りの無い返事をし、天井を仰ぐ。ニコチンが染み着いた空を蛍光灯が黄色く照らす。
再び携帯電話が震える。今夜が満月だと伝えられ、カーテンの隙間から探るが確認出来ない。月が浮かぶ方角には高層マンションがあって、ベランダに出てみても洗濯物を干す女性しか見えない。

よく成美さんは洋服はデザインより生地、生地よりサイズだと口を酸っぱくして言う。サイズさえ間違わなければ様になるのは、なにもファッションだけじゃないのに。恋も仕事も身の丈にあったものを選ばなきゃいけないんだ。

ちなみにあの女性の場合、ミニスカートは止した方がいい。ふくろはぎの筋肉が逞しすぎる。ちょうど心地よい風が吹き、色とりどりの洗濯物が揺れた。

成美さんはどんな気持ちで、この夜を眺めているのだろうか。未だに流れ星を探し、見付けられずに居たらどうしよう。

僕からは月も星も見えないとメールに乗せる。すると、すぐさま希望通りの返事をくれた。

明日、プラネタリウムに行きましょう。

# 7

7

週に二度も呼び出されるのは珍しい。早起きした僕はマキを無視し洗濯機を回す。家事の中で洗濯だけは嫌いじゃない、マメにしていると思う。洗面台の収納には柔軟剤が何種類か常備してあり、その日の気分で選んだりしている。
雨宮とドラッグストアに行った時、柔軟剤の香りを次々と嗅いでしまい気味悪がられた。

今日はおひさまの香りとやらに決め、背中で洗濯機の振動を感じる。

「今日は、早いんだ？　」

開けたままにしたドアからマキが顔を出す。寝起きのマキはますます悲劇でサイダーの口を開けさせる。

「バイトは？　」
「うん、午後から」

顔を洗おうとしないのは二度寝をする為だろう。きっとドアを閉めに来たんだ。

僕は業と足をドアへかけてやる。この部屋で熟睡はさせない。僕と同じような浅い眠りを繰り返したらいい。

「にぃに、足の爪切った方がいいよ」

流石のマキも不快を露わにする。自分の潰れた小指の爪は棚に上げ、こちらの足を見つめてた。

「帰りに爪切り買ってくるね。あと水も」
「水？」
「そんなにサイダーって美味しい？　」

生え際を掻きつつ、その場へ座り込む。マキの前髪は雨宮が言った通り、癖が強い。それも内側だけで、こうして見下ろすとよく分かる。

「アパートの近くに安いスーパーがあったの」

「……買う金あるの？　」

膝を抱えた姿勢で首を回す、不自然な角度で僕を伺う。

「もし万引きして捕まったら、にぃにが身請け人になるんだろうね」

喉に張り付いた笑い方をする。

「それって金を寄越せって言ってんの？　」
「違うって。想像して楽しんでるだけだから」
「夢みたいなら布団に行けよ」「ねぇ、にいに」

通り過ぎようとしたらシャツの裾を捕まれた。

「……何？」
「兄と妹の関係って永遠なんだよ、やっぱり。それこそ覚めない夢ってやつじゃん」

元より細い目をさらに細められ、爪先から寒気が駆け抜ける。まるで繋がっている分の血液だけ反応したような、ざらついた感覚。僕は勢いをつけてマキを振り払い、リビングに向かう。床へ敷かれたブランケットがマキの抜け殻みたいで蹴り上げた。ペットボトルをぎりぎり軋ませる姿を、死に損ないのセミが笑っている。

みーん、みーん、みーん。

僕の住む街は春になると桜が咲き、冬になれば水溜まりは凍る。そんな当たり前の街。この風景が好きかと訊ねられても嫌いではないだけで、明日引っ越す事になっても構わない。

成美さん曰く、そんな風に考えていても、結局は生まれ育った街へ帰りたくなるらしい。もしくは、帰れない街に似た雰囲気を選ぶんだと。

サイダーを買いにマキが言っていたスーパーへやって来た。僕が通っている店と違い、泥がついたままの野菜等に出迎えられ、自動ドアの先には品だしする店員の尻が並ぶ。昼時とあって総菜コーナー前には、親子連れや作業着姿の男達が集まっていた。

十分あれば周りきれてしまう店内。サイダーはお茶などが品薄になっている中、一本も欠ける事なく陳列されている。それでいて冷えていない。奥ののものを取り出そうとすると、脇の鏡に人影が映った。それを何気なく見ていたら、サプリメントを物色していたその人もこちらへ気付く。

手元から箱が落ちる。

「あれ、成美さん？　」

そのシルエットには見覚えがあった。いつもと雰囲気は違うものの、立ち方が成美さんだ。

僕はサイダーを二本から三本へ握り直し、改めて声を掛ける。

「こんな所で珍しいね？　今日休みだっけ？　」

カゴに入れてから顔を上げた。と、そこに成美さんの姿はなくなっていた。辺りを見回すが、今見た映像だけが不自然に切り取られたみたいだった。

床には新陳代謝を上げると謳われたダイエットサプリが落ち、棚に戻してやると同時に携帯が震えた。

「……もしもし、成美さん？　今、何処？　」

「え？　何、いきなりどうしたの？　」

棚に寄り掛かって、受話器に耳を押し当てる。

「出先でね、成美さんに似た人を見たんだ。　これって幻覚かな？」
「幻覚って、何？　そんなに私に会いたいの？」

「うん、きっとそう」

成美さんが優越感を得ているのを、いつもよりずっと近く感じられる。

「でも、今日は周りはうるさくないんだね？」
「え？あぁ、今は車内だから」
「こんな時間に連絡くれたから、今夜は会えないって言われると思った」

成美さんが息を飲む音が、いつもよりずっとクリアに聞こえる。

「ねぇ、どうしたの？」
「待ってるから、成美さん。　プラネタリウムで待ってるから、来てよね？」
「う、うん。　行くから！　ね、そんなに悲しい声出さないで」

僕は声に出さず頷き、振動を伝えた棚から商品を落とす。中身を抜かれた商品達が僕を見上げている。

# 8

8

成美さんはメンズ向けのバッグを売っている、と聞かされている。お世辞にも華やかと言えないルックスでも、洋服のセンスや知識量がそれを補って僕らの関係を築いた。成美さんの言葉を昭和臭い、説教っぽく受け取る事も多いが、同時に懐かしくもあって。思えば、出会いもこのプラネタリウムだった。

アパートから二十分程歩いた、駅から遠くバスも停まらない場所に科学館はある。着飾らない建物は一見、工場みたいで、前の道を行き交うトラックが良く似合う。
僕が見つけた頃には壁は灰色だったけれど、たぶん最初はクリーム色のはず。敷地内の噴水がそれを教えてくれる。

節水を理由に七色に輝く噴水は週末しか流されない為、中央では乾いた水瓶を担いだ男は暇を持て余す。僕はそんな彼へ近付き、瓶を覗き込む。そう、ここだけは汚れずクリーム色をしているんだ。これを見つけたのが成美さん。

あの日、成美さんは偶然通り掛かった僕を科学館のスタッフと勘違いした。僕としては顔を瓶へ突っ込む女性など関わりたくなかったが、謝罪と言い訳を一方的に伝えられてしまう。で、聞いてみたら何の事はない失恋話。恋人と別れ、貰った指輪を捨てたいと言った。

当時から雨宮と関係を持っていた僕は、パンツを無様にロールアップした成美さんの愛人になるとは思いもしなかった。それに妙なロマンチストの相手も懲り懲りだ。
噴水のふちに座り、会話が一区切りするのを待っていると、成美さんはバッグからハンカチを取り出して足を拭き出す。指と指の間を丁寧に払い、手入れが行き届いた爪をきらきらさせる。それから僕越しの太陽を遠い目をして眺めた。
この時の成美さんは退屈な景色から抜け出した、抜群の存在感を放つ。

きっと恋に落ちる瞬間って、こんな感じ。ぞくぞくした。勢いと下心に任せ、僕は成美さんをプラネタリウムに誘ったんだ。

今日最後の上映時間が迫っている。成美さんから連絡は無い。仕事が忙しいのか、気が変わってしまったのか。どちらにしろ僕から連絡しない。それは成美さんの悪女気取りの骨頂が約束をすっぽかす事、忘れた振りする事にあるからだ。
それに雨宮の男選びじゃないが、優しくしたい相手に逃げられたなら、優しくしてくれる誰かがやってくる。
コンクリートをずる足音に振り返ったら、マキが居た。

「にぃに？　」
「……何？　」
「や、あ、あのね、外で座り込んでる人が居るって」
「待ち合わせがあるんだ」

「雨宮さん？　」

首を横にした途端、マキは回り込む。

「すっぽかされちゃったの？　」

「まぁね」

「じゃぁ、一緒に帰ろ？　もう終わりだから」

「不審者の報告はしなくていいのか？」

「兄さんが迎えに来てくれたって言うもん！　」

マキは科学館の入り口に向け、手を振る。見れば、いかにもマキを顎で使いそうな同僚達がこちらを伺っていた。マキの説明を受け、慌てて挨拶をしにきたが、頭から爪先まで好奇心を滑らされる。しかも、ある一人の顔には露骨な誘いが書かれ、出かけた拒絶を煙草で押し込んだ。

「ねぇ、にぃにを紹介してって言われちゃった」

「必要ない」

「だよね？　雨宮さん位、可愛くなきゃ駄目なんだもん」

「別に可愛くなくてもいい」

同僚の前で浮かべていた笑顔を火と共に消す。

「え？　だって可愛くないより可愛い方がって」

「そうだな」

「なに、それ」

「マキには関係ない、さっさと行け」

二本目を取り出し、マキを睨む。

「にぃに、ここで待っててくれるよね？　一緒に帰ろう？　」

僕は応えず、空を見上げた。

「なぁ、まだプラネタリウムってまだ観られるか？　」

「え、あ、うん。あと一回上映あるよ？　観てく？　」

その提案には素直に頷く。マキの声音がぱっと明るくなり、僕を招いた。こっち、こっちって優しい方角へ。三角形はたまに辺が伸ばされて二等辺になる。

# 9

9

今朝、何事も無かった風に成美さんからメールが届いたので、僕もプラネタリウムは妹と観た事を返しておいた。ほぼ貸し切りの最終上映をこっそり盗撮したところ、雨宮の言う通り、何も映っていない。そして、雨宮が今飲んでいるサイダーも真っ黒だ。

「なんだよ、イカスミサイダーって」
「彼のお土産」
「ふーん」
「あ、ヤキモチ？　」
「まぁね」

雨宮はセックスが終わるとすぐにシャワーを浴びるのに、その後は下着姿で過ごす。

「髪、拭けよ」
「えー、めんどくさい。　拭いてよ」

水気を全く落としていない旋毛を押し付けられ、乱暴に拭ってやると、次なる面倒を持ち出してきた。

「トキちゃん、元気？　」
「トキ？　」

「うん、天然記念物な妹ちゃんだよ」
「生きてはいるよ」

ソファーへより沈み、僕の腰を足で挟んでくる。

「おい、髪拭けないじゃん」
「ねぇ」

雨宮の肌の上だと黒い下着はシミのようだ。個人的には白を付けて貰いたいが、服装に関しての権限は恋人にある。これは思っていても口にしないが、雨宮には着せかえ人形としての楽しみ方も存在する。

「ねぇってば！　」

起き上がり、首にも絡み付いてきた。

「雨宮、どうしたんだよ？　」
「どうもしてない」
「サイダー、炭酸が抜けるぞ？　」

テーブルへ手を伸ばそうとすると、雨宮は身を乗り出して噛み付いてきた。あうあう、声に出しながら甘噛みされ、僕はどう反応したらいいか、また正解は何なのか迷う。雨宮の事だから、どれも正解で不正解なんだけど。
ただひとつ言えるのは、欠けた八重歯だけは僕を本気で砕きたがっている。

三分経ってから雨宮を剥がすと、飢えた口にサイダーをしゃぶら

せた。雨宮は黙ってそれを飲み干し、ゲップと共に体を横たえる。
頬に張り付く髪を払う指先が何かを握りたそうに丸みを帯び、僕はその穴へ手を突っ込んだ。

「ごめんね」

寝息に謝罪を紛れ込ませる、雨宮。僕は寝た振りが本当になるまで考え事をする。恋愛の先にあるもの、とか。

「にぃに、何考えてるの？　」
「寝たんじゃないのか？　」
「うん、これ寝言。で、何考えてるの？　」

穴に入れた指を締め付けてくる。

「この部屋の片付け方、とかかな」
「えー、本気？　」
「てか、なんでリビングに靴を脱ぎ捨てるんだよ！　」

しかも片方だけ、を。すると雨宮はうっすら目を開けた。

「あれ、もう片方、どうしたっけ」
「覚えてないのか？　」
「わたし、そんなんばっかだ」

再び、全てを閉ざすよう目は瞑られる。もしここで僕が指を抜いたら、このトンネルは何処へ繋がり、誰に埋められるのだろう。

「雨宮、起きてたらセックスしよう」

僕から誘うのは珍しいのに、反応を示さない。肩を揺すってみても薄ら笑いを浮かべるだけ。

「なんか、にぃにに誘われながら眠っちゃうのもいい」

「おい、雨宮」

くるり、背中を向けて膝を抱く。歪みのない背骨を見せつけられた。

「雨宮、もしかして泣いてる？　」

鼻を啜る音がした。

「知らなかったの？　わたしはずっと泣いてるんだから」

臍に顔をくっつける位、小さく小さく体を折り畳む。そこのボストンバッグへ詰め込んでやれそうだ。

もし雨宮を積んで逃げ出すとしたら、何処に行こう。肉よりサイダーが好きで、野菜よりサイダーが好きな僕らはドリンクコーナーに住み着き、霜が降りて、そのうち凍る。

ねぇ雨宮、問い掛けようとして止めた。既に眠気を無くした体は熱い、キスして甘い気泡を分け合う。

ねぇ雨宮、社会に触れる部分が他よりずっと少ないはずなのに、誰より傷つけられたって思っちゃうんだ。そう感じなきゃ、生きられないから。

僕は空っぽの雨宮へ息を吹き込む。こうやって酸素を送り続けても、一方では空気が抜けていく。ひゅー、ひゅー、ひゅー。

# 10

１０

その日は彼女達に関わりたくなかったのに、自転車に跨るとマキが後ろへ飛び乗った。
早朝は雲一つない青さ。腰を上げ近付いたら、良い香りがする。誰かの朝食だろうか。

実家暮らしの時は毎朝食べさせられた。父が揃って食事すれば二度目の離婚は無いと言い、みんなで従ったんだ。特に僕は実母がそうさせたと知り、文句を言わなかった。母は父の手料理を食べられなくなった辺りから、父を生理的に受け付けなかったのだと思う。幼いながらも僕は、生理的な嫌悪はどうしようもないと知っていた気がする。これは許すとか認めるとかの次元じゃなく、もっと単純で残酷なものだから。母は今でもきっと後悔だけはしてないだろう。僕を引き取らなかった事も。

と言って、現状を母の所為にしたりしない。全ては僕が選んできた結果だ。

河原に沿って建てられる工場達は煙を吐き出す。知らない間に雨が降ったらしく、ぬかるみがスニーカーを汚した。地面に座るのを諦め、姿勢をハンドルに預ける。と、肘がベルをこつく。ちりーん、錆び付いた音がする。

それにしてもいい天気。流れる煙を追う。踏ん張って上半身を反

らしたら、口の中がサイダーの名残で甘くなった。それを唾と一緒に吐き出そうとした時、マキがやっと居心地の悪さを言葉にした。

「にぃに？　」

呼び掛けは何度か続くが、無視した。するとマキは丈のある草を掻き分け、堤防を降りて行った。その足取りは乱暴だ。

「おい、何をする気だ？」

仕方なく高い位置から訊ねる。声が届かない距離とは思えないので、今度は僕が無視されたんだろう。河原に着いたマキは屈んでは石をひっくり返し、少ししてから立ち上がって水面を睨む。

僕も続き、膝まで茂る草を駆け下りた。

「何してるんだ？　」

質問にマキは視線を対岸へ外し、僕も釣られてなぞる。向こうには畑が広がっていた。

「にぃに、サワガニ探そうよ」

「は？　」

「サワガニだよ、サワガニ」

急に楽し気な声へ切り替え、僕の手を取るマキ。

僕は事態がいまいち飲み込めないが、再び石をひっくり返し始めたマキに促され、ひとまず屈む。身を低くしたら、それまで聞こえなかった川のせせらぎを見付けた。

マキは反面が濡れた石と乾いた石で囲まれ、オセロ盤に乗っているみたい。僕もひとつ、返してみる。

「サワガニ、いた？　」

「おい、靴濡れてるぞ」

浅瀬まで伸びた足はすっかり水分を吸い、歩くと鳴いた。その擦れる音が、サワガニを探す理由を聞いてはいけない気にさせる。

「掴まえて食うのか？　」

ふたつ目を返し、川へ投げ込む。石は水面を二三回跳ねて、沈む。ちなみに調子が良ければ七回くらいは跳ねる。

「サワガニって食べられるの？　」

マキは中腰のまま、こちらへ近付いてきた。

「食うんじゃないのか？　」

食う為に探しているとは思っていない。むしろ、食う為に探していないと分かっていたから、そう言った。
マキだって一旦は頷いたのに、目が合った途端、泣き出す。垂れた滴は石を水玉模様にし、切ない匂いが蒸発していった。

「は？　なんで泣くんだよ？　」

くたった襟元で鼻を拭い、明るい声を探されるのに腹が立つ。マキの未発達な喉仏は嘘を付くのに慣れておらず、言葉を妙に震わせるから意味が無い。
それに黙って聞いてやれる程、僕も大人じゃなかった。

「おまえさ、何なの？　何がしたい訳？　」

思ったより、ぐっと冷たい言い方になる。このまま立ち去ってもいいが、苛つきが勝った。膝に涙を押し付け、体を折り畳むマキ。
僕はその肩を強く押し、悲鳴と共に川へ落とす。
涙を薄めてしまう位の大きな水しぶきは僕にも注がれ、それを冷たいと感じた瞬間、僕こそが泣きたくなった。

尻餅をついたマキは動けず、一方僕は寒さから来る震えじゃない振動を堪える。

「にぃに、大丈夫？　」

「うるさい」
「ねぇ、にぃに」

何を思ってか、マキは僕に向かってピースする。

「サワガニピース」

そのピースは最高に無様で、同時に僕から引きずりだす凶器に映る。無意識の内に僕は腹を押さえていた。

「ねぇ、覚えてる？　サワガニはキレイな川の中でしか生きられないって」

「知らないし、そんな事」

マキは川の中で泳ぐような体育座りをする。陽の差す水中ならマキでも透明に見えた。

「そっか」

水面を激しく叩き、それから歪んだ笑みを浮かべる。

「サワガニピース」
「だから、何だよそれ」

「海じゃ生きられないサワガニのやせ我慢のポーズ」

これ以上は付き合いきれず、僕はピースを握り潰しながら、マキを立ち上がらせた。

「やめろ」

どさくさに紛れ、マキが透けた素肌を押し付ける。

「気持ち悪い、やめろ」
「にぃに！　あたしね！　」
「離せってば！　」
「嫌！　嫌だよ！　」

剥がそうとすればする程、まとわりつく。

「にぃには渡さないんだから」

「はぁ？　」
「一緒に帰るんだもん」

胸元を叩かれる。まるで開かないドアをノックするように。
マキからの包容には性的な熱は感じないが、執着心は腰が引けるほど帯びている。

「にぃに、あたしはにぃいの妹じゃなきゃ生きて行けないんだよ」

シャツを手繰り寄せ、出来た隙間に自嘲を押し込む。

「あたし、サワガニと一緒だね」

くぐもった言葉にはざらつきしかない。僕は視線以外を捕らわれ、右に工場、左に畑、これらを隔てる川に身を置く映像を脳へ垂れ流す。

そして映像の中には一匹のサワガニもいた。サワガニは爪を突き上げ、ピースをしている。僕はそんな彼女に拳を作りたかった。

# 11

11

どうも三角形のバランスが良くない。マキが加わった事でこうもバランスが崩れるものかと考えていると、成美さんからメールが届く。そう、アンバランスの要因はマキだけじゃない。

成美さんは最近マメに連絡をくれる。もちろん、くれるのは喜ばしいが、会うまでには至らない。一方、雨宮からのメールが少ない。最低限のやりとりさえ億劫らしく、電源を落とされてしまう。食って寝て食うのライフスタイルは三方それぞれに引っ張られ、結局僕が体調を崩した。

発熱したと成美さんに送るが、見舞いは期待出来ない。風邪をうつされたくないと、会わないでいい理由を与えるだけ。　マキに薬を買いに行かせたら、バイトを早退し看病されそうで、雨宮に持って来させると妙な薬かもしれない。よって、こうして一人で転がっているのが最良と言える。熱に浮かされながらも、平衡感覚だけは手放したくなかった。滲む視界を認められず、目を瞑る。と、瞼の裏に張り付く文字と目が合う。

成美さんの働く店は来月リニューアルをするらしい。スタッフが増え、責任も増したと言う。
成美さんの毎日は、出来の悪い後輩のフォローをし、失敗したその後輩を元気付ける為、食事をご馳走したりする事。食事内容をたまにメールに添付し、実際働いている姿を見せなくとも、イメージさせるんだ。

まず白い手袋をし、ショーケースからバッグを取り出す。サイズや素材の説明をきちんとこなし、値引き交渉されようものなら優雅にかわすのだろう。嫌味のない、控えめな笑顔を浮かべる成美さんはメールから組み立てられる。

けれど、その成美さんには奥行きはない。

ここでやっと眠気がやって来て、考えるのを止めたくなる。どうあれ成美さんが援助を続けてくれればいいし、成美さんと僕にはセックスが残されているじゃないか。切り札にもジョーカーにもなり得るけれど、奥を感じたいならセックスが手っ取り早くて確かだ。

もしかして僕は壊したいのだろうか。いや、壊されるなら先に壊したいだけ。　ブランケットを頭から被り、もう考えない。テレビを付けたままだったが成美さんが好きなアニメなので流しておく。そういえば、狼のマスコットの代わりを貰っていない。

遠くでインターホンが鳴っているような気がする。そのうちドアは勝手に開き、靴を脱がない来訪者がすんなり寝室までやってきた。

「起きてる？　」

洗い過ぎたブランケットからヒールが透ける。

「大丈夫なの？　」

成美さんは屈み、丸まった僕を撫でてくれた。そんな優しい手付きに見開くと、ショーツ、それもナプキンの張られたものが映り込む。血と石鹸が混じった臭いが鼻について、夢心地もこれまでだ。僕はスカートの中に手を伸ばす。

熱がこもった空間は指の進入に慌てて閉ざそうとしたが、こじ開ける。成美さんは不本意な姿勢、足を左右に広げた尻餅をつく。

当然、血を流す膣をいじるのには抵抗がある。普段ならしない。成美さんが思いの外、抵抗しないことや、ブランケットの目隠しが妙に興奮させるんだ。

ぺりぺりとナプキンがショーツから離れる音がする。何色か分からない糸を爪で掻き切って、奥へ触れてみた。すると成美さんは小喘ぎ所か、息遣いすら潜め、畳に爪を立てた。

今までの愛人達が喜んできた風に成美さんを扱う。僕にテクニックと誇れるものなどない。

膨らんだクリトリスを湿った中指で転がす。もっと強い刺激を与えたい時はフードからそれを剥き出し、強めに押せばいい。そのうち成美さんは痙攣を起こし、出し入れする刺激が滑らかになる。

「や、やめて」

ここで初めて成美さんは嫌がった。一方、僕はその言葉を待っていたんだ。拒みを合図にし、強弱をつけた愛撫へ切り替える。一番長い指を中で引っ掛けるよう折り曲げ、溜まった液を掻き出す。強く弱く、浅く深く、指を増やしては減らし、成美さんを壁際へ追い込みたい。

顎を反らす成美さん。目を閉じる事で迷わず引いたアイライナーが

見える。その縁取りを消し去りたい乱暴な願望と、一枚布をかみ、モザイクめいた背徳感が僕をより熱くする。
こんな気持ち、初めてだ。抱きたいより、壊したい。いっそ壊した方が楽になれるのかもしれない。いつ向こうから壊されるのか不安になるくらいなら。

ついに呻きに似た喘ぎを漏らした成美さん。うっすら滲んだ額に前髪が張り付く。

「どうして？　」

こんな真似をしたの、と続けたいのに続かない。僕が言わせない。答えなど簡単だ。成美さんが女で僕は男、それだけなんだ。成美さんも分かり切っているから、泣き出すんだろう。深くめりこむ前歯がルージュを削き、赤みの抜けた唇にさえ吸い付きたいなんて、僕は何が恋しいんだ。何が足りていないっていうんだ。

成美さんはもう快楽を隠さなくなった。濡れるままを受け入れる。だから僕がブランケットを払って抱き締めても、一瞬だけ裏切られた顔をするだけ。
実はこの一瞬こそが最果てなんでしょう。僕は他人事みたいに気付いてしまう。
どうやらマキが帰宅したらしい。僕を呼びながらキッチンを抜けて来る。初めて耳にしたであろう僕の名に成美さんは身を固くした。そんな成美さんの上で僕は人差し指を唇へ押し当て、微笑む。

人差し指は複雑な臭いがした。

**12**

12

「にぃに、何やってんの！」

ノックもせず開けておいて、マキはすぐ僕らを剥がしに掛かる。成美さんは体を丸め、思い出したみたいに咳込んだ。シミだらけの体が酸素と世間体を取り戻す為だ。自分だけ着衣の乱れを直すと、僕の下から逃げていく。

マキに背中を引っかかれ、彼女を見やる。

「何だよ？」

「な、何だよじゃないよ！　こんな事して」

「こんな事って何？　セックス？」

表現に身を震わせたのは成美さんも同じ。この部屋にはそういう臭いが充満しており、壁へ寄り添ったとしても無駄だ。そうやって肩を抱き締め、無理矢理されたと誤解させたいなら、僕は幾らでも証拠を並べてやる。マキ、僕、成美さんを繋ぐ三角形の中に。

とりあえず僕もシャツを羽織り、マキを押し戻す。力が入らないマキはそのまま座り込む。手にしていた袋から真っ赤なリンゴがこぼれる。

「にぃに、顔色悪かったから。　風邪引くと一重になるから」

リンゴを見つめ、マキは呟く。

「で、バイトを早退したんだ」

「あたし、どうしても気になっちゃって。　先輩も帰っていいって言うから」

「単にお前が邪魔なんじゃないの？　帰ってくれた方が仕事がはかどるとか？　」

と、背後で音がする。マキと二人で振り返ると、似付かない兄と妹に成美さんが嫌悪を露わにしていた。

「こいつ、妹ですよ」

顎でマキを差す。

「う、……そう、なの」

嘘と言い掛け、頷きに変える。壁伝いに立ち上がり、心を庇いたいのか、ボタンを握り締めた。

「似てないでしょ？　母親が違うんです」

「じゃぁ、あなたは母親似なの？　」

質問の意味に迷う。けれど成美さんの目は真剣だ。

「いえ、僕は父に似ています。顔だけですけど」

「そっか」

どうやら答えを間違ったらしい。明らかにトーンダウンする成美さん。と、マキが口を挟んでくる。

「それは、あたしがブスだって言いたいんですか？　あたしが男顔

だって言いたいんでしょう？　」

リンゴを握り締めたかと思ったら、それを成美さんへ投げ付けた。どん、鈍い音の後で、一連の行動が現実として僕に伝わる。幸い、成美さんに当たらなかった様だが、成美さんは僕に抱き付いてくる。それはもちろん、悪意のある包容。腰に回された指先は熱い。

雨宮なら分かるが、成美さんがこんな大人気ない事をするのに、僕は正直引いてしまう。事実、腰も引けている。それでも構わず引き寄せ、熱を押し付けてきた。

「にぃに、雨宮さんに言いつけてやるんだから！　」

「雨宮さん？　」

マキと成美さんの目線が同じ高さになる。

「にぃにの事が好きな、すっごい美人。アイドルみたい人」

雨宮を武器にするマキ。

「どういう事？　浮気してるの？　」

「別に。成美さんだって、結婚してるじゃん」

「こ、これは」

マキが二投目を握ったのが見え、僕らは自然と距離を置く。成美さんは髪を透くが、指摘されたリングに引っかかり、余計に絡まってしまう。

「成美さんが構ってくれないからだよ、雨宮とはそんなんじゃない」

困惑していた成美さんが、言葉に冷やされていくのが分かる。僕は成美さんが悪い、成美さんの所為だって傷つく。

「ごめんなさい」

だから成美さんから謝る。

「いいんだよ、寂しくさせないでね？」

伸ばされた手に頭を押し付けた。犬や猫でも撫でる風に成美さんは僕を慰める。そしてバッグから薬と封筒を取り出す。リンゴよりずっと役立つそれらを、マキに見せつけながら受け取った。

怪訝に眉をしかめたマキは封筒の中と目が合い、やっと僕らの関係を察した。そして今度は成美さんがマキを見下ろす。リンゴを踏みつけて、腕を組む。

「お兄さんには金銭援助をしているの」

「それって援助交際？」

「まぁ、そう思ってくれても構わないけど」

「それだけじゃないって訳？」

成美さんはここで僕を見た。

「彼が私を好きなのよ」

それは何処かで聞いた台詞でもあった。マキも雨宮と比べるのが忍びないからか言葉を失っている。

しかも残念な事に僕らの沈黙を言い負かしたと判断し、笑い出すからもっと気まずい。

「じゃ、また連絡するね」
「うん、待ってる」

そう応えるのが精一杯だった。優越感を漂わせた背中が消えるまで僕は俯く。途中、振り返ったりしませんようにって必死に願いながら。
そしてドアが閉まったなら、笑い出す。

僕は賢い成美さんが好きだった、自分の魅せるべき部分を知っている成美さんが好きだったのに。本気で裏切られた気分になってリンゴを握り締める。八つ当たりをされると分かり、マキが曖昧に微笑む。
「あの人、可哀想だね」
「は？　」
「雨宮さんも可哀想、あたしもにぃにもみんな可哀想なんだよ」

リンゴを剥いてくると言い、マキは部屋を出て行った。少ししてキッチンから聞こえる嗚咽。みんな可哀想と言いつつ、自分以外を哀れんで泣いている。もしかして、それは気持ちいい事なんだろうか？だったら、僕は誰を思って泣こう。

ふと、母が過ぎった。

# 13

13

歯医者の前で雨宮と待ち合わせる。虫歯が痛むらしく、電話の声は消え入りそうだった。
成美さんから金を得たものの食欲がわかず、僕は駅前で花を買う。その際、店員に恋人へ贈るのかと聞かれ、曖昧に傾げたら首の筋を痛めてしまった。

世間を斜めに見ると、誰もが寂しそうに映る。陽は傾き、影がおいでおいでと手招くみたいに揺れている。
「お待たせ」

雨宮のパンプスが視界に入る。値が張るものだろうに、踵が潰されていた。

「待った？」
「生憎、一時間くらいは平気なんだ」
「ふーん、誰かさんのお陰？　」
「妬いてるの？　」
「まっさか」
笑った拍子に欠けた八重歯が覗く。あぁ、また殴られたんだ。雨宮は隣に腰掛け、流れる人々を眺め始める。

「前歯をやられる前に別れなよ」
「……妬いてるの？　」

一呼吸おいて答えた。

「まっさか、前歯は保険がきかないんだぜ？　」

雨宮は少しだけ驚いてから、静かな微笑みに戻す。よく見れば歯だけじゃない。頬や目も腫れ、完璧な印象を崩す。僕が斜めから見ているのもあるが、雨宮の迫力は薄れる。
僕らの視線は再び、大通りへ向けられた。

「で、その花はくれるの？　」
「欲しい？　」

「赤いバラなんて、スティックサイダーが渡してるのしか見たことないけど」

「スティックサイダー？　」

「知らないの？　前にキーに付けてたじゃん」

「あー、あの狼」

スティックサイダーって名前だったんだ、とは言わなかった。回復したはずの喉が億劫がった。
話が続かないなら手を繋ごうとすると、雨宮は何かを握っている。

「何、それ？　」
「星の欠片」

手の平には爪痕と折れた八重歯。

「わたしの田舎はね、折れた歯を屋根に向かって投げるの」
「そうすると星になって願いを叶えてくれるんだろ？　」
「あ、もしかして知ってた？　」
「うちの田舎でもそうだったから」

雨宮から消毒の香りがする。そろそろ植木に紛れて座るのにも飽きて、僕は雨宮の腕を取る。恋人が付けた痣通りに指を重ねてやった。

「指が長い奴は神経質なんだって」

雨宮がそのまた上に手を重ねてきた。雨宮の指は男等より、少しだけ長い。星の欠片と一緒に花束も持てる。

と、今から治療に向かう少年が雨宮を指さす。隣の母親が慌てて制し、雨宮は笑う。まさに花が咲いたみたいな笑顔で、少年は恋に落ちていく。

「ねぇ、星の欠片を投げに行かない？」

先に助手席に座られてしまい、仕方なくハンドルを取る。

「今から？」

ルームミラーを調整し、座席も後ろへ動かした。何故か雨宮はこの仕草を嬉しそうに眺める。

「だってマンションじゃ投げられないもん」
「じゃぁ、次は野球選手と付き合って投げて貰えばいいじゃん」
「って言うか、わたしも妹に会いたくなっちゃったんだ！　」

シートベルトへ器用に絡まる雨宮。

「死んだんじゃないのか？　」
「うん」
「じゃあ、帰っても意味ないだろ」
「会えるよ」

首に巻き付くベルトを見ろ、顎を引く。

「今時、心中なんか流行らないぞ」
「あ、怖いんだ？　」
「雨宮は怖くないのか？　」

対向車に照らされて、色素のない髪が透き通っている。雨宮は珍しく考えていた。膝と沈黙を抱き、流れる景色に答えを探す。

「怖いに決まってるじゃん、バカ」

やっと答えが導かれた時には、車はインターへ差し掛かっていた。

「何処に行くの？　」
「星の欠片を投げに行くんだろ？　」

「うん」

素直にＥＴＣカードを差し込む雨宮。

「山田太郎って」

カードの裏へ記入されたサインをつい口に出してしまった。その名に雨宮は歯の痛みを思い出し、リュックから薬とサイダーを取り出す。

「これ、あげる。おまけで付いてたんだ」

身を乗り出し、ウィンカーにキーホルダーを釣り下げてきた。腹に柔らかな胸の感触を感じる。

「スティックサイダーだよ」

バラを抱えた狼が居る。ちなみに僕のバラはさっそくトランクへ仕舞われた。雨宮のトランクには様々なものが詰められており、一度入れたらもう取り出されないのだろう。バラの中に埋もれたテディベアは目を開けたまま眠っていた。

雨宮は喉を鳴らし、サイダーを飲む。ギアの代わりにキレイな後頭部を撫でたら、ゲップをされた。そのまま僕の股に頭を預け、踏み込むアクセルを見守る。

きちんと温度があって、息する度に肩が上下していても、僕には雨宮が生きていると思えない。この雰囲気は成美さんとの突き当たりを感じた時に似ている。僕はやっぱり他人行儀で、とうとう干上がってしまった雨宮を見下ろすんだ。

これまでの雨宮は容器に数ミリの膜を張った空っぽだった。膜は無色で底は見えるけれど、剥き出しじゃ無い。

「トキちゃん、元気？　」

そう言われ、マキのピースした姿が浮かぶ。もしかしたら、あのマキのハサミが雨宮の膜を破ったのかもしれない。けれど、雨宮から流れ出たのは血ではなくサイダーだと思う。サイダーの気泡はかすかな痺れを起こし、弾け、消えてしまうんだ。ねぇ、雨宮はその時、手を伸ばしたの？

暗闇の高速道路は何処までも続いていく気がした。気付けば雨宮は寝息を立てている。転がったペットボトルには三センチ位の飲み残しがあり、波立つ。

昔、誰かから聞いたことがある。人間は三センチあれば溺死出来るって。なんでも詰め込み、凍らせたがる雨宮が溺死を選ぶとは考えられない。が、白い肌がふやけ、それをめくったら何が残るのだろう。僕らは肌で何を包み隠していたんだろう。

それを最初に知るのは、たぶん母。僕はこれから母に会いに行く。

# 14

14

立ち寄ったサービスエリアにはプラネタリウムがあった。サイダーを抱えた雨宮は案内板をじっと見ている。

「見たいの？」

「うん、でも今の時間はやってないみたい」

僕は返事をせず、煙草で空を指す。プラネタリウムが必要なのか分からなくなる星空は広がる。大きな月も浮かぶ。

二人でボンネットに腰掛け、ぼんやり灯る自販機と向き合う。

「ところで何処に向かってるの？　」

「星の欠片を投げられる場所」

鼻で笑って雨宮の前髪は舞う。

「わたしの実家、逆方向なんですけど」

「別に雨宮の地元じゃなくても、願いが叶うって迷信がある所なら何処でもいいじゃん」

すると納得したらしい。特に文句を言うでなく、ペットボトルを含む。

「君の地元、何が美味しいの？　」

「今ならなんでも旨いよ」

「もしかしてお腹空いてるとか？　」
「もしかしなくても空いてる」

サービスエリアに着くなり、カーセックスを強請られた。それに応じた僕の次なる行動は決めてある通りだ。

「セックスしたら、次は食う」
「まだそんな事を言ってるんだ」
「別にいいだろ？　」
「まぁ、好きにしたらいいよ。自販機でカップラーメン売ってるよ、それにしたら？　」

ジュースのお釣りを差し出してくる。

「わたしは塩がいい」
「結局、雨宮だって食べるんじゃん」

「並んで食べたら、なんか映画みたいじゃん」

映画、と喩えられ、成美さんが過ぎる。あれから成美さんから連絡は無い。仮に捨てられるなら、何かしらのアクションがあるはず。それこそ、お別れの台詞を用意していそう。このままじゃ二人は駄目になるとか、この関係が僕の為にはならないだの、そんなニュアンスで。

僕は味噌ラーメンにする。機械に備え付けられたお湯を注いでいると、雨宮が走ってきて珍しそうに覗き込む。短めの割り箸を握り締め、湯気の向こう側を探った。

「ほら、自分のは自分でやれよ」

雨宮のカップを放る。

「わたしね、硬めが好き。ほら、この肉」

手際よく蓋を開け、乾燥した四角い肉をひとつ摘むと見せてきた。

「これがふやけない内に、噛みしめるの。ぎゅー、って」

膝の上にカップを乗せ、踏ん張る雨宮。ぎゅー、の意味を教えようとする。

「で、味が染み出ちゃった後に、カスみたいのが残るんだ。それも好き」

月に肉を重ねる雨宮。

「そんなの、どうでもいい」

背中を向けようとした頃には、雨宮自身もどうでも良くなっており、無表情でお湯を注いでいた。ラインぎりぎりを目指し、慎重に満たしていく。

僕の手は熱で温められ、そんな雨宮の背を押してやりたくなる。ぐっと堪える気持ちがカップへ爪を立てさせた。

運転席に僕、後部座席にうつ伏せた雨宮がラーメンを啜る。時折、鼻も紛れて啜る雨宮は泣いているのかもしれない。湯気でフロント

ガラスが曇り、車内に閉じ込められた気分になった。

「ねぇ、さっきから携帯震えてるよ」

「食ってるし、出たくない」

「妹からだったら出ていい？　」

伸ばされる手に携帯電話を握らせる。が、すぐさま投げ返された。足元に見知らぬ番号が光る。

「誰、それ？　」

「知らない。それにマキの番号も知らないし」

「じゃあ、妹かもしれないじゃん」

再び手にしようと乗り出した所で着信は途絶えた。雨宮は運転席と助手席の間に挟まり、足をばたつかせる。

ふいに、雨宮ならそうして何処ででも溺れられるんじゃないかと疑ってしまう。

「今夜はここで寝て、明日プラネタリウムを観ていかない？　」

「え？　」

「観たいんだ、プラネタリウム」

近い距離から横顔を探られ、キスされた。

「別にいいけど。その代わり、手を繋いで寝てもいい？　」

突然ドアを開け、食べ掛けを投げ捨てた。そのまま隣の席へ滑り込むと手を差し出す。よく分からない交換条件だが、それもいい。

僕もカップを捨てようとしたら、背中にくっつかれる。

「ねぇ、一口ちょうだい」
「スープしか残ってないけど」
雨宮は構わず飲み干す。
「しょっぱいや」
「何がしたいんだよ？　」

「何にもしたくないよ」
僕の座席を倒そうと、下半身にまとわりつく。
「今日はもうしない」
「分かってるってば」
素直に目を瞑ってみせたので、手を優しく繋ぐ。
車内はラーメンの匂いに包まれている。香りのしない空気を求め、喉を反らした僕は確かにワンシーンだ。映画じゃなく、アダルトビデオだけど。
と、雨宮が笑う。
「何を笑った？　」
「うーん、今は笑う所かなって」
「鋭いな」
「じゃあ、わたしに刺さって死んじゃえばいい」
ぐりぐり、頭を押し付けてくる。

「おい、ボタンを舐めるなって！　汚い」

悪戯にボタンを含んで、音を立てる。僕は這い上がってくるキスに備え、しっかり目を閉じた。

# 15

15

僕らは目覚めるなりサイダーを飲み、プラネタリウムへ向かう。車を降りると未だ朝の気配が残っており、雨宮が捨てたラーメンにも水分がある。
それらを蹴り飛ばすのはパンプスで、ダンスをしてるかのようなご機嫌な音をさせる。

「はしゃぐな、転ぶぞ」
「だって考えてみたら、プラネタリウムなんて何年か振りだもん」

浮かれる雨宮をトラックの運転手等が羨まし気に眺め、その後で僕を睨む。

「ほら、早く行こう」
「折角だから見せつけてやればいいのに」
「分かってて騒いだのか？　」
雨宮は肩を竦めただけで、それ以上言わない。ただ、派手にデコレーションされたトラックと並ぶ雨宮は透明。透き通って見えた。
それは擦れ違う人が振り返る程で、思わず呼び止めてしまう。
雨宮はすぐに振り返り、手を振ってくる。

「ほら、チケット売り切れちゃうよ」

駐車場の有様から、そんな事はないと断言できる。むしろ、無くなってしまうのは雨宮本人かもしれない。どう表現したらいいか迷うが、今日の雨宮は死を漂わせている。きっと、意識してやってい

るんだ。僕は段々と腹が立ってきて、雨宮の腕を掴んだ。

「やめろ」

「何を？」

「いいから、やめろ！」

低い声で告げる。

「そういうの好きじゃない」

「同じ事、言うんだね」

「山田太郎か？」

「違うよ、妹と」

雨宮は脇の売店へ入っていく。いらっしゃいませ、おはようございます、と元気な挨拶が無表情の背中へ吸い込まれる。一直線にドリンクコーナーに向かうと、そこから手招きをした。

僕が入店しても、レジから挨拶は聞こえない。

「雨宮……」

声を遮れる。

「例えばさ、わたしが今日死んだとするじゃん？」

扉を開け、サイダーがよく見える位置に屈む。

「で、そう言えば今日はいつもと様子が違ったとかって話になるの。元気が無かったとかさ、妙にはしゃいでたとか」

スティックサイダーのキーホルダーが付いているサイダーを手に取る。

「それ、成美さんから貰ったやつ」

「じゃあ、こっちにしよっと」

バイクに跨るポーズを選んで立ち上がった時、雨宮はくらりとバランスを崩す。

「おい、大丈夫か？」

「――平気、幸せ過ぎて立ちくらみがしただけ」

どうしようもない嘘を付く雨宮は蒼白い。

「君にも、そんな言い訳を残してあげなきゃいけないのかなって思ったんだ」

「は？」

「猫は死ぬ前に姿をくらますんだよ」

僕の手を払う、雨宮。

「君はわたしが居なくても生きて行ける？」

雨宮の手を取る、僕。

「――行けないって言ったら、一緒に行けるの？」

「うーん、どうだろう」

即答された。けれど次に目が合うと、雨宮からは何も漂わなくなっていた。

「サイダー買ってくるから、チケットよろしくね、あ！　」

僕を通り過ぎようとし、慌てた声を上げる。見ると雨宮は頬の横で手を握っていた。

「にゃーお！　」

雨宮は鳴いた。

大きな傘を広げた形をするプラネタリウム。最新鋭の機械を導入したものの、今は相合い傘状態。雨宮はどの席が一番見えるか比べに比べ、結局僕の隣に落ち着く。

「傘みたい」

僕もそう思ったと言うと、白い天井を揃って見上げた。

「でも、あそこに線があると閉じられない傘になっちゃうね」

骨組みをなぞる白い指、僕はそれを黙って追う。開演を知らせるアナウンスが響き、姿勢を正す雨宮。視線に気付き、微笑む。

落ちていく照明の中、雨宮の笑顔が浮かび上がる。

「なぁ、雨宮」

「し！　もう始まるよ！　」

「サワガニピース」

ピースの隙間から沈黙が突き抜け、星が生まれると同時に息をつかれた。

「なにそれ」

「海じゃ生きられないサワガニのやせ我慢のポーズ、かも」

「だから、なにそれ。にしても、キレイ」

いっぱいに煌めく星色。そこに秋の大三角の説明が添えられる。秋の大三角は南の空低くにある三つの星を結んだもの。うお座のフォーマルハウト、くじら座のデネブ・カイトス、ほうおう座のザウラク（ほうおう座α星）で出来ている。フォーマルハウトは一等星、デネブカイトスおよびザウラクは二等星だが、周りに明るい星がないためよく目立つ。

先日もマキと一緒に観た為、星の名がすんなり入る。一方の雨宮は耳を塞いでしまう。

「やだ、せっかくいい気分なのに！　勉強させられてる感じ」

膝を抱える。肩を揺すると、舌を出された。

「こうして観てる方がキレイだよ」

抱えたまま座席を最大に倒す。鼻歌を口ずさみ、星を自分の思いのまま星を繋ぐ。

「ねぇ、かに座はあるのにサワガニ座はないんだよね？　」

また、どうせ答えの要らない質問。応えないでいると、ふいに頬を撫でられた。

「海じゃ生きられなくても、宇宙なら生きていけるかもよ」

いつか流した涙の痕をなぞってくる。

「やめろ、くすぐったい」

「サイダー飲む？」

僕は黙ってペットボトルを含む。肘掛けを越え、雨宮が胸にしがみついてきた。頭を撫でろと促され、髪は指からすり抜けていく。それを何度も何度も繰り返していくうちに眠くなってくる。

「おやすみなさい」

優しく言われ、そっと目を閉じた。

次に目が覚めた時、雨宮は居なかった。

# 16

１６

離婚の条件のひとつに、母は住み慣れた街を離れるとある。母の移転先は誰も教えてくれず、また聞こうとも思わなかった。何故なら僕には母が越した場所が何となく分かっていたから。

インターを降りたら山で囲まれた景色が広がる。窓を開け、ラジオから流れる悲しいニュースを逃す。ギアを一段上げ、アクセルを踏み込んだ先にはコンビニがあり、点滅信号を左折すればホテルが見えてくるはずだ。
きっと、母はこのホテルで働いている。

ゴルフ場が隣接している為、ホテルのロビーにはゴルフウェアーを着た客が多い。カラフルな色彩に混じりきれない僕の装いは隅へ弾かれ、絵画を背負っている。

「お待たせしました」
部屋を取るでなく、フロントに来るなり母の名を尋ねた僕にも丁寧な対応がされる。

「お尋ねになられました従業員ですが、先月からお休みを戴いてます」

女性は書類を確認しつつ、申し訳ないと続けた。耳に付ける機械

から指示が流れるのだろう。大きな目は瞬きが多く、視線も泳ぐ。
「プライベートな事はお答え出来ませんが、お言付けは承ります」
「母は会いたくないと言ってるんですね」
「あ、いえ、そういう訳では……」
慌てて、胸にあるマイクへ告げる女性。
「どうやら息子さんのようなんですが……あ、はい」
思えば女性は従業員リストを確認せずとも母の名に反応を示し、判断を責任者に仰いでいた。
「お待たせしました」
今度は男性がやってきて、頭を下げられる。ゆっくり上げた顔には責任者と書いてあり、貫禄が滲んでいた。女性は責任者の登場にそそくさと場を離れ、僕もとりあえず会釈する。
「今日こちらへは何で？　お車ですか？　」
「はい、途中までは」
「途中？　」
「あとはヒッチハイクとバスで」
「なんだか映画みたいですね」
白い手袋を添え、微笑む。
「あの――」
「彼女に子供が居たのは聞いていました。もしかして、お父様似ですか？　」

近くのソファーを促し、通り掛かった従業員に珈琲を用意させる。上品なスカーフの下にあるプレートには南野と記され、どうやら支配人らしい。さっそく運ばれてきたカップを寄せ、足を投げ出してやった。

目尻に沢山の皺を刻む、一見は優男な南野だが、名前からして厄介そうだ。

「煙草いいですか？」

「いや、申し訳ない。ロビーは全面禁煙なんだ」

正面へ腰掛けた途端、口調がくだけたものに変わる。

「煙草は止めた方がいい、体にいい事がひとつもない」

「母さんも吸ってませんか？」

「だから、言ってるんだ」

途端、僕のソーサーが揺れた。

「会っていくといい」

名刺の裏に病院名が綴られる。その間もソーサーは揺れ続け、描かれたバラだけが無邪気な鮮やかを保つ。

「母の姓は南野さんになっているんですか？」

「いや、君と同じだ」

「……再婚しなかったんだ」

「君のお父さんはしたんだってね」

カップを置いて、静かになるテーブル。

「だから、彼女は再婚しなかったんだろう」

南野の視線が玄関に向かう。丁度、団体客がバスから降りてくる所だ。

「悪いね、こんな田舎のホテルでも忙しいんだ」

「いえ」

「暫くこちらに居るなら部屋は用意しておくよ、遠慮なく泊まっていけばいい」

旋毛を見せて立ち上がる南野。綺麗事を言いながらも噛みしめた唇を隠したいんだ。

「もし、僕が息子だって偽ってたらどうするんです？　」

僕も席を立つ。南野は汚れたハイカットからシャツへと僕を確かめ、それから肩を竦めた。

「実は見間違えも出来ないくらい、君を見に行ったんだよ」

言い終え、南野は背を向けた。逆に僕は俯きカップの中へ視線を沈める。サイダーと違い、珈琲じゃ底が分からない。深い、深い闇のようで鏡でもあって。鏡の中の僕は語る。母は南野と愛人関係にあった事を。

母はよく僕を連れ、このホテルに食事をしにきていた。もちろん、父には内緒。ホテルで食事をした日は父の夕食を揃って残すのが決まりで、露骨過ぎない食べ残しをすると母は褒めてくれた。
南野は当時、給仕をしていたと思う。父の料理は受け付けなくとも、南野が提供するものなら何でも美味しそうに食べる母。明らかな心変わりを前に、僕になす術など無い。

で、今の南野は客一人ひとりに笑顔を振り撒く。僕は彼の視界に入らないよう、タクシーへ乗り込む。行き先を伝えた後は沈黙を構え、窓の向こうを眺めた。
先ほど逃した悲しいニュースは緑色になったか、それとも空色になったのか。見渡す限り、二色しかない世界。二つの色を区切る為に道路がある、そんな錯覚を起こすくらいだ。

「お客さん、良かったら道の駅がありますよ？　寄ってきます？」
「……見舞いに持っていけるようなものある？　」

戸惑いつつ話し掛けてきたのが分かる。

「うーん、月並みですが花はあったと思いますよ！　」
「花、か」

建物が見えてくるとスピードは緩まり、答えを待たれる。観光客らしい数人が見受けられるが、特別そそられる要素もない。ありきたりな道の駅と言っていい。

「あと道の駅を下りた先に沢がありましてね、とってもキレイですよ」
「沢……」
「よし！　じゃぁ、寄ってみましょう！　」
運転手は駐車場へ停車してから、こちらに頷いた。
「こちらで待ってるんで、ゆっくりして来て下さい。あ、メーターは止めておきますから心配しないで下さいね」
ドアが勝手に開く。追い出されるみたいな下車と商品整理をする店員の視線がぶつかり、ぎこちない会釈が交わされる。
「あの、沢ってありますか？　」

雰囲気に飲まれ、仕方なく聞いてみる。
「沢？　ああ、この階段を下った所にあるよ」
店から出て、階段を示してくれた。場所はうっそうと草が茂っており、言われないと階段とは気付かない。覗き込んで沢を確認してみると、水面がきらきら輝く。朽ちた木の段を慎重に降りて行き、むせかえる緑の香を目一杯吸い込んだ。
「お客さん、タオル用意しておくからねー！　」
店員が手を振り、店へ引っ込んでいく。その言葉が僕を裸足にさ

せ、熱された石を飛び越えさせる。
石の中には熱いだけでなく尖ったものもあって、僕を決して歓迎しているのではないと告げられた。
片足で跳ね、もう片方は裾を捲る。投げ捨てたスニーカーが上を向いたのを確認したら、勢いよく浅瀬へジャンプする。

大きな水しぶきは顔まで届き、水道水とは違う感触が僕の熱を奪う。体の芯が冷える、そんな感じ。
僕は腕を組み、寒気に耐えてみる。こうすれば冷静な思考を取り戻せるかもしれない。

と、赤い背のカニが視界を横切っていく。

サワガニは燃えている。

# 17

17

そこは療養所だった。庭では医師を名乗る男を囲んだお茶会が開かれ、花束とビニール袋を持て余した僕はテラスから投げ捨ててもいいか尋ねる。
車いすに乗った母は答えない。

「今日は息子さんが来てくれて、嬉しいねぇ？　」

看護師と名乗った女性がティーカップを二つ運んでくる。ひとつは僕に、もうひとつは自分用。母には呼び掛けるだけ。

「ローズティーよ、お口に合うといいけれど」

正面へ腰掛け、穏やかに微笑んでみせる。何故か医師を始め、この建物自体から病院の臭いがしない。

「あら、苦かったみたいね」
僕の訝しげをお茶の所為にし、女性は笑みを保つ。タクシーを降りるなり僕へ「おかえり」と言い、名前を聞いた後は何も質問しなかった。木の温もりを感じられると自慢するテラスに招き、母との再会を演出する。

どうやら僕の知らない内に、母はおかしくなったらしい。何年か振りの母を前に、まずそう思う。一人で歩けなくなって、食事も出来ない。痩せて衰え、しわしわになっている。
母に一体何が起きたのか、むしろ何か起きてなければこの有様は

無い。記憶に生きる母を今の母に重ねようとしても、昔が今を覆ってしまう。
これでも再会したら、何を言ってやろうか考えたりした。けれど顔を見たら何も言えなくなるんだろうって。
確かに言葉にはならなかった。
「その花、来る途中の道の駅で買ったのね」
「スティックサイダーもバラを持っていたから」
「あぁ！　あのアニメ、おばさんも好きよ」
意地悪に返したつもりが、身を乗り出される。
「最近、サイダーのおまけになってるみたいなんだけど、炭酸が苦手なの」
ねぇ、と母に同意を求める。
「そんな事言っても、母さんには分かりません」
「あら、分かるわよ」
「事故ですか？　こんなになったの」
付き合いきれず席を立つ。サイダーを取り出し一気に飲み干せば、全てが気泡となり弾けていくみたい。雨宮にも逃げられて、何をやっているんだろう。
「お母さんに会えば、現状を変えられると思ったのね、あなた」
倒した椅子を拾う横顔が厳しいものになっている。気付けば庭も静かになり、様々な形をした視線を向けられていた。

「あなたはお母さんと暫く、向き合うべきね」
「いえ、帰ります」
「何処に？　」

女性は名前を尋ねたトーンで聞いてくる。

「何処に帰るの？　」

アパート、なんて切り返すのは酷く子供っぽい。と、着信音が響く。何度か鳴らされている番号、やっぱりマキだろう。

「もしもし、南野です」
「え？　」
「管理人の南野です」
「あ、あぁ」

意外な相手に着席させられた。

「今、大丈夫ですか？　」
「もしかしてマキの事とか？　」
「えぇ、まぁ」

マキの事だ。一日留守しただけでパニックを起こすに違いない。南野に泣きつき、連絡を取らせるくらいの知恵は流石にあるようで、鼻で笑ってやる。

「あの、マキ――」
「お兄さんが留守中に男性を部屋へ招いているみたいで」

南野は早口になった。

「いや、年頃の子だし恋人って言うならいいんです。でも、マキちゃんは男性を代わる代わる部屋に入れてるみたいで」

「は、まさか！　」

「本当なんですよ！　昨日からひっきりなしなんですってば！　」

南野の言葉が上手く処理できない。

「幾らなんでも、そんないきなり」

「マキちゃん、大丈夫ですよね？　」

「僕に聞かれても」

頭が痛む。まったくもって理解出来ない。

「何かあってからじゃ遅いんです、早く帰ってきて下さい」

「なら、管理人の権利で部屋に上がり込めばいいじゃないですか？　」

「い、嫌です！　怖い」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3373w/

---

スティックサイダー

2011年10月17日03時59分発行